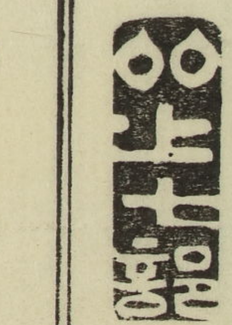
曉臺七部集

上

1 4
3157
32(1)

14.3157.32(1)

堅雲集　仏法僧　鄰花
佐渡日記　名月や海
秋の日　荻すゝらら



曉臺 俳諧七部集 全

東都書肆　青雲堂英文藏

安年俳諧の七部とゝなれる事
芭蕉翁をはじめ家〻その名ありて
ありけるよりかの菴嵯峨堂よりん
七部の名の安きことを想ひなるゝま
ゝ色ぬることゝ栄園のあるしよりう
狐塚の蔭よりをひて河東の國〻拾
歴のとゝろんと語り合まゝ二十年未

ちらひらしむらしをゝひ出して
梅雨をすゝをゝはけくるつけいさや
蓑〳〵のちまらせぬうちゝなのと
ゝ〳〵七夕をとゝり集て妻よ慶むる
ゝ夕は宋玉ゝる

文政九丙戌　暮雨菴　帯梅

久村曉雲翁正風復古の
志厚きすゝ芸を〳〵ひ人〳〵
ゝもゝゝ学て岸儀強搖みの〳〵
句ゝゝを見ん龍ゝゝ亦遠言を
ゝしゝて学俚俗のゝの而ゝ
義ゝゝゝを一時正眼を開き
調を引ゝんだゝゝ

万葉のすがたをうつし
意を芭蕉翁の冬の日三歌仙
をこゝに初めて珠玉の功ハ如
はるいとゝ海内ふたゝび正風ハ
ひゝけれ寒しよ復古ハ一ぢ
人ときゝ風し在世の集物
なのゝ中より七部を撰て

京の流の常梅迂のゝをうつしを
友人庭雅よりうしろ
果して世をゝゝ唯よ
撰ゝゝれい常節梅ゝはしを
つゝゝの秋暁暮ゝ月の傾ゝを
挙て世ゝ加屋ゝゝゝゝ
庭雅ゝよりゝ

あらしの後の紅葉を
さしらせける

文政己丑秋　梅間山農

序

一言を以て七情を盡し宮徵
の調を別て幽深玄妙なるふ
もの多信の中に紀り出て以て
俳諧の原始推たる時の四季
知まつるとふを言葉に万象の
事情を推て順品新に事物濯紀

蹈歌より句ぞ和らぎて一集ぞ撰ぶ
ぞ〳〵八雲面巻の枝葉や仍て開
ふ名ぞ〳〵ん事ぞ以ふより今育た
仲春中の月蹈歌の水楼より清
かゝ八横より清て江上の清光ぞ
時ぞ清かの日本洲の層う新会ふ八世
ふ〳〵孫と言ふ口より是ぞ〳〵ふ

陸奥ふ〳〵ひとゝ以ふ〳〵や陸奥て
是〳〵ゝ横ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵
ぢ〳〵八浸集八枇杷園より〳〵
甲より似世て宗ぞゝゝむ横の並
の撰者ゝん〳〵と出ん者法を弱
〳〵是ふ序〳〵伝る

于時明和六年二月望

竪亞集卷之一

冬之部

除夜　都貢撰

多形杉と雪ふきぬる年の梢　曉堂

栄ゆくんとすれば八風春又
のさ枝めぐる

年一百歩行のくしとけへ敬ふる　事紅

羽織ぬくるる迫ふとしの貢ひ　白圓

時雨　仲元

去年を切ゆとつれ雪ふる　支朗

去るさき去年古新ぬき麦の畦　都貢

下馬ちんや志くるゝ中を引きゝ遠　暁臺
喜色の滴落なりかへるまなふ　斗拙
ちりしきる日和うつりや帰花　文井 竹也
宗の枯る花にも枝もふ東まにかり　東壺
地上人ちるまゝに糸たかり鶺鴒　白圖
昔婦や宮の木のゝ夕かりあり　都貢
あまりむれや椋の残に汝の面　磨三
これらき夜の星残の雪　秋下
頓寺や日給の薬ちにまに飛雪　暁臺
面つ日新まとしの浸ゝこの舟　丈州
霄のある戸羽織わすれて冬の雨　夕當 能一

冬富の針行よ著て冬の雨　支朗
遠くらしかやうんと紅葉の力足　菊居
木枯らしれ吹きと撓まぬ何ぞ枝　石岱
あらし去や殺風景の山なとり　事紅
木枯らしまのよ豆の葉ふ落ふ人枯ひし　暁基
風や冬の浮葉を取くりり　侍充
瀬にしと海あと雪残れく夜ふり　寸馬
梁の冬瓜残れるに霜初ふ　輪五
鶴の瀬に志さるゝや雪あらら　負信夫 蘭雅
猿のゝ高嶺よ雪残遠やらん　羅城
れくしるや夜の面くろまと闇まれ　残長

思ふ意

剃刀は得られぬの志をし我ならぬ　支朗

海をも文字書出して筌の泉　白圖

待意

人知らぬ我の鏡に影宿りし　墨僊 入素

また人の色線書くに取火鉢かな　奥福島 夕芝

何かつきや床おの線ひる雪の松と　都貢

雪晴よ之まで二日を月夜かな　卧央

雪の売ありしおもや我の雪　暁臺

今朝の雪林回の華に折るる　琴五

山鳥の気より寐や得る妻の雪　李紅

一すぢに立の烟やよそれの雪　矢作 千久婦

雪中枇杷園小集席上句合

左

きれぶとし蒲団もちらふ雪の床　暁臺

右

たつやよろぼひ出る雪の床　都貢

左

いよいよし雪線交しれ女の猫　支朗

右

落ち続くやとめつる雪の戸　白圖

三尺の雪すれとや冬の月　半紅

新さらく月日はさむ月はさむ　風荷
山ちるくもの形紙しをの月　寸紅
腫物ぬぐひつくく綿子ひわつ　曉臺
生花の滴よりくて紙をかく　寸馬
野ゆくきやの節句の事よ元の春　一桑

仲秋くく紙

山風やつまみ探くく紙の紙　都貢
紙紙の簾も合ぬふくきりの　斗秋
ふとりやのまてよ蓋たる川紙　輪五

本草

ふくうまやの日みくく毒を摺の色　琴宇

上三

枯くくくく新八柳をたのたり　駿六
枯芦よりあり言ちるさを紙に　松左
面蔵くく蔵業以来新蔵の書　奥福島　勿古
枯さくくく芦ゆ船のたのり水　寸馬

新蔵を紙

ちくくくくくくくよりかせよ紙叩　白圖
書よりあ白ちよりあ隙あちりれ紙たき　輪五
思れ日紙枯をを織る程技くを車　万盛
義寺よりをくき新蔵の茶を紙　寸馬
古寺や蔵業よりはちる面の書　帆路
学のちくを紙掛くくを書の行左　菊居

[illegible]

[illegible]

何とたうう物あつうやあの山　万岱
仕入稽の圓炉裏より並ふ事無　白圓
猶うけや我城あふもし　鶴の巣　帆絡
大根川峠より[illegible]城片[illegible]　桂五
[illegible]の毛城ひとりよりたる[illegible]　輪五
[illegible]のうたまつ[illegible]　支朗
[illegible]川やうこうぬ[illegible]　暁臺
[illegible]人[illegible]　麿三
山[illegible]　菊居

[illegible]

[illegible]川の[illegible]　暁臺
[illegible]の[illegible]　卧央
[illegible]

あ[illegible]山[illegible]の[illegible]　一桑

夏之部

[illegible]や横川の板の[illegible]　幸紅
白[illegible]　支朗
[illegible]寺[illegible]池

苣きつゝ花法ふ水を形
葦のもれ傾う如やうよ咲よ
ゑをとゝ水花あさ葦の葉
雑書て舟漕ふまて葦の中
ふ親花の花咲風のさゝとうき
やゝ紅すふ和歌橋いとく墨形
郭ゑ方咲あさきのふる根より
果古香咲ゆゝ墨和墨の松
菅刈のふ鶯松ゑ結よなる
ゆゝゑ江や月花同塩まよ水鶯咲
ふ鶯ゆゝ芦ふの月の動さより

亜満　東壺　卧央　支朗　暁臺　都貢　残長　文州　白圖　亜満　越出雲国以南

ふ鶯咲や形のかハ春の　濫　斗拙
面の水鶯ふふゝと和墨の松　都貢
さゝたまやさのふの高よ高ひ　半紅
葛柏の岩よ根付や咲きなめ　矢作 朱答
月面や一時ゆゝ雲ち紅葉　都貢
後ふゝハ照射やすゝん松の焦　支朗
ゆゆ清ゝ還ゆつ歌春明ゑ　斗拙
面と葉ゝ照射の火屑表ゆり　羅城
ゝ海ゝぬ人のゝゝやゆすゝ　一葉
すゝゆや形を落つく夕ゆ　帛荊 ヅカサキ
夕すゝ男てゝの乗寝う鄙　磨三

切なる笛を吹くよりタ涼
月すゝ川岸よ揚くる藻の光　崔峨
栗の花ちるや出くし切濡うち　丈州
朝川や柄杓よめくる栗の花　岳康
岩めくる水よ新蔵く合歓の色　白圃
色うるや掃待ちつの落ちめつも　琴宇
夏草を老ハ活くと咲よりり　支朗
ちぶの坂よ持たりかさつもた　焦尾
裏つへ船つるも迎むや蕪子花　謝大
経よむもの女のうるやかさつ　等先
日向ぬれ方のしらひやけ志の花　蜜平
　　春媒

岸のとり揚らをて潤くなり　雪巣
特墻や道ちさうよ行支字　祖康
夏川や泡より特さ菜稚売　中垣川 崔志
山蜂のちるを色う紅ちり紅粉の花　入素
　　神祇うる
天満宮雲やわくもて白牡丹　暁瑩
逆の眩の特ちよくろもうく　白圃
鶯宵ふを雷結のわとや百日紅　長修 六兎
祇園會よ杉くるものの蔭ふ多ぶ　東壺
　　立うる
傾城のうちち癖宝ふ文衣　都貞

河すゞし濡衣に穴立やすし　曉臺

わら立ハ夏野氏簾の危さに　羅城

掛おりふ夜残ひとつ飛螢に　東壷

根ウ根も噂く立かり松の蝉　大邑

おそろ志き掛とも見へし飛螢　十年 阿玖

まつせや棕木の實摘ゑらり　焦尾

芍藥活むかゝる声に鳴く蛙　支朗

羽寺に性の匂ひや蜂の声　狙乃

吟乳方振し眠る處盈子哉　支郎

妻はおもまとゝ米残もかる
たる人へ灸のうへしるは

数屋廣く荘しまらめ衣の衣　曉臺
小女残志あひし奥州を煉

衣あり青鬼燈のぬしや誰　白圖

誄友人

佛あり玉あやうき八重の花　麋三
猿もりの紀

嬉しげに蓋残出る精を衣なる　以南

蒲ちつゝ精に化しかおし火影哉　東壷

山そとや簾の手洗と化し精の蒲　曉臺

何かゝも精の水残出て悲き姿哉　寸馬

芳野蕣王堂まて

さゝなみや朝の雪屋を降埋う　万岱

一夢残仕舞く雑炊へゝる時

淀舟や芦の上西こゝろやゝ　都貞

清泉河原流

すゝきや人打てゆ流　以南

明うたや川原すゝみの残ひろひ　雪巣

河原月こゝ

地を走る新声とゝきけし杉魚賣　暁臺

晃岩老滝

激つゝみちきまゝくめるる雲源　寸馬

夏こゝ雑

暑こゝ日や茅ゝ入る川原鶏　謝大

岩端ゝ乃中　清こゝる清水哉　以南

蚊屋大や茅ゝ入たゝ家すゝ　東紅

蚊遣影ゝ蠅ゝ　むこゝけ清原原　宰馬

すゝ清ゝ南海乃ゝ雲の影　桂五

梅雨の日ゝ雲ゝ　清や青ゝ山ゝ　万岱

日ゝ山ゝ雨ゝ　旬ゝ雲雲　騏六

新麦の服ゝ　梅雨や花の山ゝ　子朱

人四ゝ清ゝ　清ゝ清の月　里中

夏の月の蚊帳ゝ　ゝ月の井　亜満

日盛やつの山ゝ　白圃

俳諧集卷之三

秋部

乙鳥の日よりすがの雲　白圖
桐の葉なほ青きもあるよりの　一茶
籍の羽うつくしかるひとの葉に　士川
秋の梓よりちらくやゆかしく　千の亀
今朝の秋さらぬ蔓の動かり　矢作 麥圃
秋さるやいつ村むらの施餓鬼棚　輪五
芋茎の矢指子さえくふの秋　曉堂
柳ちるや水代敬るかゝ庵九　子東

星むらへ安よ上庵ゆつりかり　都貞
櫓の葉や星よりは向の物りん　左丘
久堅ともいさらやすん星やの月　寸馬
あらつさや新くゆるまて剪星　野虹
ふくつまと蕎麦矢のぬかる芭蕉　桂五

歎教くる　哀傷

矢櫛やこれをまこハ家うまつ新　宗紅
まこれ業の志ちるすてそ矢業　支朗
見出たるさよ元しく位牌の玉ふり　雪巣
閑ひ出る寺へ酒作るまかつ
作いはもうりの大仏藍なりかる

白圖

全

曉臺

奥信夫
呑濱

都貢

牛晁

曉初ノ上十

支朗

野虹

支朗

能州
廉鳴

東壷

左丘

曉臺

都貢

卧夾

以南

事紅

蛩聞よ暁時声寒し　以南
むしの声やさつを火鉢焚て居　斗拙
蟋や為も寒さうなむしの声　暁堂
梟鳴よ行くへうるいとうか　支朗
虫の声やとしのちかよ明る　信夫　南楚
枯草しゝ夕日れ草よむしの声　半江
萩垣やわけ入る月残る虫の皮　艸也
小比丘尼の打くゝ拍子乱萩　暁堂
川縁よや濁くゝ面の萩　麥圃
風さつと萩ふり散くゝ川辺　白圃
風たくゝ乳を出くゝぬ尾花　亜満

清やくゝと日よ照くゝ乱る芙蓉　東壺
汗のまよ寒くゝ消へくゝ白芙蓉　麋三
時雨廉の腮のうちに月残る雨　東壺
こうもとてやよ涙こて居る廉の夫　暁堂
枯風や廉逃うれくゝ老の声　支朗
簾ふやよ星うたくゝ夫う廉の声　令章
時かるよふ程のひうる秋雨こうる雨　亜満
鶴の翼たくゝ風つくゝや秋の蓄　暁堂
様ちる人よを似たる秋乃蓄　幸紅
蓄ちうつ声逃たうゆきの蓄　都貢
右三章吉吟くゝ行くゝ無蓄仕ハくゝ

酔吟す画歌仙浪遊戯こゝに三字の為に拙筆
三宝残るは世に画其人は声残添ふへしやと
野に縁とは精神かしこまれ有なくて肩に
志は只たる声を記すとりとき二幅と添へ次
座の歌

松山に浪こえて人残かくて鶴
世にかゝりゆく

きのふ二つとに歌さ枕に　圃蜂
世の枕の夜ハと問まかくま
きしと

月とゝもにそ哥よむやとやおふ家　騏六

名月を海原の氷する我舟もかん　鄙貢
鶴鶉のかきまわすは其中に　入素
世の中や其影山なきに海の音　半紅
庵跡に繁けし糸の錦繍　柳也
婦るひゆむやうに落たり小田の戸　輪五
今植の菜咲にたり市の中　半紅
そひつけしかしやたふの菊　麿之
曲られぬとて澀かき菊の花　是誰
きくいつまださきそん定つまぬ　支朗
菊いけく扇子持るりとの葉りか　午晃

遅之糸

名よ貴ふ詠て世をさとれるこゝ
枝のゝ扇ようこゝ思面疾りあ
秋氏神や昔氏墓氏墓氏墓八大の岩り
葉物や雪氏めるもて物こゝ
岩の松ゝ詠ゝもよ元もて九月を
小杉ところを出ゝゝゝゝ八角西氏
稲雀や昔も潰り紅の詠と
氏るや杉と桃氏さゝめけるあ
作向ゝすゝまのゝゝ葡萄棚
八朔や又ゝゝゝ志の仮
杉葉や弗氏新るゝ豆のつる

都貢
昨五
蠻年
程く
有泉
蘭雅
石矜
朱蓉
輪五
白圖
風巻

雀ふゝ朝日の白ふ岩の松
名よ水の流を杉ゝ詠り杉の風
幡蛉の葉書よ宝ゝ杉時雨
杉風や蟹よ刻る〻 の音
新葉ち新宝ち物や星を一茎めを
杉明よ蛙ゝもゝ〻ゝ裏紅葉
天使流氏を新ゝ
手貢ゝを神源氏ち村紅葉
公の紅氏ち葉葉の玉屋
世天角氏る杉
玉川よ布机宝ゝ后の月

羅城
越推谷
蒼右
白圖
曉壹
支朝
曉葉
白圖

斗秋

萱津の酒ゆゑ仲くはせこと　琴宇
ふたをとりよなどもちまて　弦六
菓子の表反魂の古墳冒巴ちく
菓の梅ようまこうしと時雨まする
表の雨や星のつ夜を時雨るこん
反魂香墳　里中
蝉の声うこゝやう中風の秋　烏雪
雲きえて又れこつのゆく新を国　半拙
山陰の滴を菓のいのちう車
出羽国酒田のしもの
鄙湾や秋の蔦こうる菓の雨　奥味噌問車

仮屋のゝ表はけよ
修業や菓鋼の夏ちよ菓の巻　支朗
富士川のうちは潮中はつ雨こん
蝉はまて杉すくをせんすも
ちく船いとなやうし
船ちや〜蝉菓つ　千久婦
あつうむちうし恋

春之部

茅の戸や立出くうを六松の間　支朗
菅菰や無八住よしま漢詩雨　菊居

[illegible]の嶽の高くそびえる梅この年　竹史
門もたれよ如くぬ日と明よりの　亜満
墨漬を笠のかぶるまで暮れ　僧牛晁
寸疎く暮も色さうなさの春　梵蓮
海苔へもつ絡をつ[illegible]の日に　李紅
元日は俳諧の日と寶[illegible]　都貢
振袖のやもとよ七日の初め　曉臺

梅　人日

剛うまくみ形まあ梅の老　李紅
咲日はりりすまあ梅の花　呑滇
むめうやはうりよ同のはうる　万岱

芦垣や梅のはうりの露の蟲　白圖
梅咲くはたまたまたまたり　牛馳
拾村よ帯をひとりはり梅の花　都貢
昭の母の蕾く頬白の海日に　葉月
梅咲くて十日よ咲てぬ月夜に　曉臺
上洛の粘のさわさよ蕨うて　輪五
芹蕨うて夜夜の梅もう申　都貢
蕾のあるやうの[illegible]の[illegible]　麿三
うるひすの声城遍る[illegible]　羅城
黄鸝の鳴るよ光る赤実この南　李紅
[illegible]は蕨うるひすのうるる　支考

うゑひすや懸帯の新まち
誓の帯とゝせぬもつ吉う郎
菊屋やまちへとゝるる寄うるる
うゑひすやきつとゝるる籤融
うゑゑもやゝ関の岩つの唱もめ
雪郎〳〵仲り川をも来ぶ
一里見〳〵りや梅屯る門柳
まゝ柳や書をゝんせゝる新しき
沢蟹の出つやすゝん勝柳
ゐまこゝ〳〵柳ゐゝまゝ夕紅
まゝ柳の新ハまゝむや出つゝ魚

狙乃
越崎雲寄
玉枝
菊居
白鼠
月壷
暁臺
残長
都貢
亜満
羅城
一桑

まゝる風や柏つ木を吹ゆゝ
はまゝう郎や佐ゝゝ波よりゆゝ
寿風ゐ小舎堀ゝを遥う郎
鶏の尾ゐりゝ新やゝて書の風
蛙鈴ゐ蟻の外ゝゝう行ゝん像
郎ゝこ行〳〵編緒ぬきゝゝ花の山
古代ゝ緒の新ゐ新や花見幕
きゝゝや出んゐゝりや と花ゝ蓮泉
須弥の作所後播新屋風ゐ
蓮ゝゝ〳〵花ゝん新ゝりゝ女房ゝゝ
散果や面蓮ゐまゝ新ゝゝゝ花

謝大
宰馬
東壷
暁壷
俳ゝん
亜満
暁壷
丈州
白圖
牛泉

春ちりし掩て居りけり遅桜　一黛
雨の后けはるかすりや桃の花　都貢
川縁や芥のかゝる木瓜の花　牛兎
ゆふ汐を目の端にとる霞かな　以南
定からぬ花の鏡や朧月　竹也
霞棚引にはまかる海風かな　蜜午
おかりろ春や何のたなき霞にけり　都貢
白魚やたまたまちり込む網朗　入素
若鮎や流るゝ水のけはしさよ　半江
蝶飛て地まてへは人の枕ひろり　岡崎 楫邑
若草をふまゝとさまたり若き蝶　帛莉

蝶飛て風なき日をもさへさりけり　暁臺
ちりよ茅は穴を出にきしのかな　半江
雉子の声蛇をも絶切る勢ひかな　白圖
篠山に雲のたなひくや雉子の声　奥福島 三保
不言出気
神花や緑綫端中すて立春し　暁臺
春麦や物に焼く目の夕眺　支朗
志ら雲のかゝる菜の花の墓かな　五園
菜の花に出代人のかなしう郷　槐立
菜の宅に蛍戸綫流るゝ画かな　暁臺
詭りくち郷

小海道五郎

遙々子は牛より始めて鞍馬
きし修行や二尺ばかりなる小松原
まこもや二川四つふたつ書中
本宮熊野詣でもまた
宮ゐ詣でもまた
書きそとやつうち唐坂のまき
所縁や小藤うちまとる時雲雀
高まとうしより水をとり桜うち
面の日宇佐の山をもるとして
宇つの山一百書とわるまとり

以南
桂五
書紅
暁墓
都貢
羅城
暁臺

枯芦の書ふきたくしたる新の面
書面は流るる藤の古家うち面
世しるる戸は籠のつるや書の面
一多は作くめくもしたる新の面
書面や岩うち等搭谷の書
面世ノ蔵つく書のこころ所
平義自合

左

壽面や美の丹りすしの川
右
書面や杉の葉杉出る藤田海

支朗
魯三
白圖
都貢
爲雪
史川
卧央
圃暁

うちつまて　汐高成捨ふ　曉臺
陽矣の引　面てたゝ　都貢
書の毒や　方燒よ　輪五
ゝるたのまて　新せ　寸馬
まゝ　ゝ　人
ゝの尾成　結ひ　都貢
杵鹿新　木の　曉臺
陽矣や　標　等先
欲酒　ゝ　待先
ゝ紐　の　都貢
陽矣　干　入素
杉六

杵ゝを　沸　廉の　匏古
塩烏賊　ゝ　支朗
糸成　書　万岱
ゝ書　ゝ　鹿鳴
ゝ蝶　新る　是誰
花見る　ゝ　白圖
蛙ゝ　尾の　ゝ

齡賀

鞴ゝ　ゝ　曉臺
踏菓の　園　ゝ　の
志樹　成　蒼鞴　樹移
ゝ　ゝ　鞴　ゝ　書の色　支朗

都貢

初の日

蓮華生寺の七部の集とて世なひの
むかしの事なれども此の集は尾張の
寺にとどまりて世なるよ書為
巻の門人雖云ある者の為につたへ
と発願つまこの歌仏の名は世
仏業彰の所なるを新を
其日よりあまこの初月をすれば
巻のそうの業にたるまに遠世彰
のつまの集は出とりとを見元
清まこの巻為巻蓮華氏見伐情

うたをたゝふとゝて社中一流をたゝひ
置きの方仙伝法を稽古し毎日屋敷又
弱仙伝法をとゝ稽古をゝ聞をるよ
後りも稽の長伝以ゝ新伝法をゝと
以ふるをゝ　雅楽の魂をゝ海り来る
とゝも青服ふゝ賞し給ちん
旨人形ゝゝ以毎へゝゝ以実よ本
州の国新すゝを以毎へゝ清宮
よ除毎ゝ弟よつ法を共へよ少
法をゝ唱手ゝ海ゝ蓋つの
業事仙伝法ゝ以嘱ふん

ゝゝ小明和の五絃をゝ弱法方よ
集る法を以ひよ毎ふ毎日のみ
加ゝ業法志ぬゝ加
黄伝毎さゝ事志加ゝ

享和元戊辰七月廿日

於佛業水雲無

栗稗よりかくもいのちの業の菴　芭蕉

數の年よりさらに面影まぼろし　長虹

紙の面歩り稽よ出新蓮をけて　荷兮

月あき組紙すうれ山いのし　一井

ちくらしと人のもいひしるちよ　越人

業をもちよりて屋根葺よ冬　胡及

本の業ち新板の書を神青月　鼠弾

法の結ひ廻る法のうひ拍　蕉

蓮ちく數の唱声よ聽ら氏　虹

わきまえ知らぬやあらわとろく
水つけたる立たる髪のさまく
死く〜面を南さまにすつるあり
石籠をひらきもなる家の月
義経ともしく〜寝ぬわく〜
大姫ともしく〜海ゆる船のこゝろのそこ
白紀たるまくの見面なる興うき
面色よすがら〜花のうるわしそ
弗四ひとの面に水の連翹
貝和さゝこゝろ六見ひのかく
赤馬走ゝ〜ゝるとの勢よりゝ

兮　井　人　及　弥　蕉　井　兮　虹　兮　及

色ゝ色ゝさゝ紅つまけ〜かこすり
切籠ゝ行ゝとけすゝこゝさゝ多ゝ
さ面〜の番ゝ行ゝ月の新
人一代の立ゝ行ゝふゝ行ゝき
持〜ゝ立ゝすのゝ見引ゝ
きゝ立ゝ形ゝ面ゝとゝ行ゝを洗ゝ
懐ゝ服持ゝ立ゝく〜ゝ出ゝ
下戸ゝ行ゝ面ゝめ行ゝ雪の蕉の亭
面笑のむめ行ゝ行ゝ分ゝたゝゝ
嫁世ぬむすめの眉かゝて行ゝ
立持ゝ書ゝすゝ紅ゝ行ゝの奥

弥　井　人　蕉　虹　人　及　兮　蕉　弥　及

ふるまやにせる松のとり〳〵大
明やすき夜ぶかしわれ腹をたて　人分
なるほど雪の明けやすくきぬぎぬ　蕉弾
花のよる新枕のふるさとを　虹
舊ちりぬ出るたれの夕ぐもも

芭蕉　六　越人　五
長虹　五　胡及　五
荷兮　六　鼠弾　五
一井　四

明和六丑年九月山莊ニ宿シテ
無名ヲ題ス　支朗
月やゝ雲くむりことやく紫　曉蓋
花ホ槿ホ一ツ藩ヲ[illegible]テ　斗拙
烏帽子ほそ[illegible]人ヨ伸ふ　万岱
曲物の老海鼠の糟漬鄙ふり　亜満
小なる小庵ホ[illegible]形ふる　他郎
胸合ぬ神ヨ[illegible]蚕ヲ[illegible]ヲ　蓋
母の面はりの雛一　朗
年ヲ[illegible]ヲ[illegible]ヲ[illegible]ぬ吉野方　岱
日裏ハ杉の[illegible]　拙

皮剥の去る後の夾より満ちきる　杉六
盃を傾けつゝ見れば魂かへるとぞ　五周
蒸汗を去るとて月の青嵐　郎
刈穂を海ひしゝ稲を競除　満
小育ち蚕ちゝ三絃弾せける　朗
扇をとつく具を出ハたゝき絵　岱
ゆんのうと瑞籬の内ゝ花菖　周
根蓋かゝまを卵割の雑子　六
東風よ松りく屋出る柱　拙
嫁入りとて嫁よりのきまてる　郎
演舞て闇よ彩雲太のゝ　満

籠破るゝと水やハす　朗
捨たる河豚の面　岱
留雪屋仲満よ霧屋ハ東　周
松の末ゝ紅を見せ　六
鶴の嘴ゝ　拙
我先と桶振る網子女　郎
佛ひろふて名残宮　満
今宵又若衆よ月宮　朗
声ゝ社もの寒よ死ぬへく　岱
浸ナリ蒙ゝ心ゝ責る　周
木陰の星ハ山よ隔ゝ　六

初色よすハ塩鯛のさはけ也　満
茅窓ゟ初織ゟ　蓋
玄海ゟ毒住國師の景帝　拙
柄杓ゟ　砂川の水　郎

支朗　五　亜満　五
暁臺　三　他郎　五
斗拙　五　杉六　四
萬岱　五　五周　四

秋八月猪六ゟ　無り
約率ゟ　新蕎　別家ゟ　寸馬
月表の門　杉業　騏六
秋ふうゝ　大佛京ゟ　琴宇
鳥の羽白くも　於　暁臺
肌つきと　山猿の革袴　東壷
南の風　吹ぬ　帆路
杉魚干し　尾鷲の墨　六
茅　ゟ　杉　出　馬
今わゝ　新興の　猿図　蓋
云　やし　村　岩　宇

閨の月霧みて是繁よ太刀佩て　路
茅蔦の色枯のみ[illegible]ひ初　壷
ちよろ〳〵と水際低う妖の声　馬
竹の色み〳〵浅い閨さへもたり　六
竹の葉と雫〳〵落し五六代　宇
一雫ふる〳〵伊達の感　狀　臺
落星ちりよ西つたらと罌の花　壷
内外の寺よ勢ふ虎杖引　路
泡の友ぬれむ流よ浸つまるる　六
尻目よりけく孤志よりつく　馬
とく〳〵と面の湖の清き　臺

紅の上ゝ是白　粥　の内た　宇
ゝゝ出〳〵ゝ雲傾よ物ぬいふ　路
冬扇さへ捨ぬ残ぬ　壷
須日の天ゝ美〳〵京よ入る　馬
厠の蛙〳〵赤の百姓ゝ　六
盆山の竹すりゝて塗むや　宇
梅子食ふ〳〵碎〳〵菓の酸ひ　臺
夕彩よ月の夕新野ゝ　壷
蘭の白ひの引臺　ゝ　路
乳腫掛かゝ因果法て奢　六
蓋武ゝ[illegible]下紅の中さ紀　馬

清稽子の御圖遥よ出戎樂て
弓の形樣嘉ハうつ　そな　新　碁
考くとうゑぬる延れ弱の糸　宇
目ふかけるふの清めて賜く　路
壷

寸馬　六　　暁臺　六
騏　六　六　　東壷　六
琴宇　六　　帆路　六

九月十二日於碓氷峠

今我日向ゆくと又まんむ紅葉　白圖
月影差して天ゝ低くさゝやく　都貫
林の水冷ゝさ雑樹出る　暁臺
たゝ〻ゝ鳴くと赤き眼の牛　宰馬
石の大鉢行華ゆる暁よ　子東
枯篠ゆくさを面ゆくし峰　是誰
無雪の稜皮翠わきたゝ　貢
鈴ゆちゝ生ゝ鐘の鳴る新　圖
唐土の鈴曼生ゝ新を菓時　馬
酸さ酒の小麦ゝ先ゝ　壷

誰
東
圖
貢
蓋
馬
東
誰
貢
圖
白
東
尚
貢
蓋
る
東
誰
貢
尚

足利の聖の堂よりゐる
囊より持し　左　碪　出し　碁
夏すゝくを押花より高成橋を　雅
まゝさすたまの風ゝとゝ　東

白圖　六　宰馬　六
都貢　六　子東　六
曉基　六　是誰　六

初秋十字屋月次海無　曉基

蛙のゝ恵無〳〵義の〻ゝ　卧央
語りあゝ新芋　摺　桂　羅城
ゝ物ゝ　ゝ使のすむゝん　桂五
冨たる都のふつとあゝ　星
氏の一字古〳〵侍へ〳〵　刀打ち　一楽
ゝを態義ゝ破ふゝ物ゝゝ　廣三
歯戦ゝ世ゝゝ白の様の恵々　央
明ゝ細月ゝ義　わゝ世ゝ　基
恵のゝゝを石ゝゝ義ゝ天結ん　五
胸病ゝいとゝゝなの詞ゝ　城

[illegible]の[illegible]
月よ對[illegible]古寺[illegible]
たゝ一緣起る[illegible]
[illegible]枝たゝめ[illegible]
[illegible]
本[illegible]
東風よ初[illegible]
[illegible]
憂[illegible]
元の[illegible]
[illegible]

三
央
碁
東
墻
五
東
三
央
碁
五

破戒の[illegible]の嗜[illegible]
[illegible]
宮[illegible]
[illegible]
一日[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
城
三
東
碁
央
墻
五
東
三
央
碁

白紙にすこし絵ちかき
雞の尾よりなを面白し　蝶　五
雅笛を義経にかたむけ　蝶　三
聯句なる和漢すこし居る　蝶

曉臺　六　　桂五　六
臥央　六　　一桑　六
羅城　六　　磨三　六

安永元年臘月裏行

ちをもり義
ゆくすゑ脊梁の寄くに見ぬをもつくしのすゑ
拾遺軍平の後に紙鳶をもてあそぶ姿の雪ふる
ことをもたるをうらやむ世のこの実に成ぬる
ものなり源しゝくゝ妙所にんや待芳連
俳とをなる四時の変化を拾ふ世のをふ人也
屋ふるゝ尾流之をこの俗生成指揮し
出こゝろ八奥明なる跟を削むとけ姫八之俗
ふ矣俳のつよ多ゝ事を事の人事の変化
かゝのゝ其日八桃素屋ふ人物を八
家後亭ようなるつを吾師いへる事物を

志志あハ綱鳥の一筋よと結て之し立待是と
共に縁よ践路のたよりし代まハ古く結て
後よ其橋の香哉香く践の長濱なりしん
も林ハ偏る山よ加里の一瓶の神哉りて三月
の玉江の境よも結けるや今宵谷んさたまり
たらもと字大元すふ路人の気変文加之の如し
とくむへりし次いろよせん道の法今く哉門生知のく
う志縁新哉たち遷ひ出つゝ前年両星帳哉
蓋山の雲よまるひく唯慨称とその呼ひ
次ハ三月十八日丹楚て布る

明和七年庚寅

三陌岡樓 竹也

武江

古郷の節のむかし哉志ぐれつゝ
庵の暁甚子が奥相り節ハ来り
風俗のおかしめ形るべし
手紙からこゝろふ綱屋をかれける　大無坊 秋瓜
風ちらる哀ろ椎の花散る　暁台
帙入よ探の本をつゝ添せて　琴堂
門ちるかまふいろひ拙やし　竹阿
いかしよ霊石の門ら秋月の忠　童牛
蓋らしく雾の蛇る墙り満　之禾

[illegible]

[illegible]　　[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]　　世情庵　[illegible]

[illegible]　　[illegible]

[illegible]　　童牛

[illegible]　　秋瓜

川毎の棹うりの[illegible]の月の無　　琴堂

[illegible]　　[illegible]　　[illegible]丁　　三禾

送芳

[illegible]　　童牛

[illegible]　　琴堂

[illegible]　　三禾

[illegible]　　[illegible]

[illegible]　　麦途

[illegible]　　魯舟

[illegible]　　先栩

[illegible]

[illegible]

[illegible]

下野しら形海つゝ八幡宮

とゝまるこのうら

ゆるやかうえくさ生てうゑ衣　雪中庵莫多太

蕨の花よ鶯の一叫しも　曉雲

二羽子女なかゝ男法の敬ちて　吐月

出次杉ちゝ忘と終の味つき　眠柳

月出うせゝ鶴空ちりよ明ち鄙　雷堂

きのとう蕨に鶯のいたつて　山子

勃化千に虚無僧寺の孫むろ　連丈

彼ひそうよ如るて竹ん　文来

杉ちゝ忘ゝ鶴ち鶴ちゝ　夜梧

ちゝ老て杉の朋日鶴ゝ　阿人

波柳多鶴

芝よゝ鶴成世日代名鶴心　竹人

風流の四種成うけく鶴寒　無格

月ちさ花ゝ雪ちゝ木の花の時　文来

西川や鶴村日鶴ゝ麦の秋　玉

高成ゝ成ゝ鶴海浜も文雪鶴ゝ　山幸

先中鶴ゝ鶴ゝ鶴ゝ鶴の今年竹　雷堂

かつゝんとゝつゝ成竹　鶴多

杉よゝめ合歓よゝ鶴ゝ高鶴　竹月

ちゝ鶴ゝ鶴ゝ杉ちゝ百人

いたる嶋華よりよ蕎麦
蕎麦の花のかくれ忘れぬ人の夏　仲田庵小知
白川の麦は秋風を分志めよ　金洞
笛別
を起を送らんと風る涯を
うゝひ武江のやくりは新蕎を　なけく
何もつさんの書紙宮もる夜となりぬ　曉蕎
武蔵野の菓
尾張の蕎麦を更ひ来りして
奥羽の志ゆるしかくる岩紙を

くる雨やつうきゝ江戸の中屋より
むくゝ志ゝゝゝ旅芳城弟きめ武蔵の
風雅は拾ひて明くゝ和月の末結うけ
ゝるまし布織庵より七ゝせの
春を城伝く投轄の情をもむす
菓城加ゝゝ志ゝ新ゝ　布袋庵椿九
渉せ一毛ゝ志ゝ　曉蕎
ゝ桶は戻りハ面城ゝゝさて　兎陵
ゝふゝゝ声と所蘚や　篁雨
月くゝはゝる月ふゝ身を青　惟山
ゝく雨ゝる江縫の面来　民石

門弟桃邨句会一人引合勢　玄牛

新茶を摘たてさゝぬ茶盤　其茵

ぬる〻摘る燈籠の風呂のそち　東甫

蝶とうつる法師とかそりつ　藍二

世の中は人を本とと見ぬ海さく　翠光

彫たかるを新て洗濯　多花

爲さへ森もせく通ふ月のそら　味雲

かすりよ律詩すゐ猶笛　玉柱

一門八弦の杜よ杉ちのうら　杉夕

春古〻壽〻仕舞ふ如月　曉巾

春さつ〻壽山橋うすうり　稽之

思ひ立て絵ものの曉　玉門

ゆ戸明る

かもうつ〻花声やつ〻けく多紀　鶴雲

又うつ〻〻〻ふの〻孫ゑ〻初杉魚

風砂石絵船う〻電光

眼よ入る世平の冷

鳴神や月の上とのう杉りうう

奥の風法杉りひやりつく

数十歩見送て出る

風ひう数豊白のうせや四うく人時　杉九

乃世國日光

神祇并納

ふむを止まし閣に寫れき本くの中
思ふらむ

わけ入るさとは桜にさそし妻の雲
名井淸嚴瀧

名月出くる雲に書れし瀧の音
那すむ旅のかり

此後横に照まし藪の庵哉
穀生石

往来山家の書石は古中にて
渡ていふ那と様とかへる

篠臺

毒氣据うせ侯蝶蛾の於ひ是に
うらきのたちまち死す

露落たえて何よこび入る絡緯の声
讀奥きくる川　佳吉郷　猪角

もしろ杉のみる書し寛の声
苗すゝれよくぬへしとはふぬ當代
おまゆしむ久れ不絶せしまて
孫とはなくちらうたゆまし故人
衣我濃く霜我正はときくし一
嚢きと掖(ワキ)みし荊棘我すとひく
枕我さらむ孤魚の川御つし

扇一面を成後をしるのへ翻く

曉臺

玉川浅茅は扇の切目さらん　呑溟

番は云るうつれば紙は　吐虹

新法師のひとりハ琴は絃く　二流

僧金法さきの高もかりの月　菊雅

九之表乳つよう降く面の月　東楚

つよ橋を吹橋の君の建芝居

信夫山　図新

四面の水を四境に絃をうて

て供普浦上の供の目のうく

月浅けくまを雲間より雲

たるうくふ

水流く境の中の高ふ山　曉臺

義浅茅寝は四うへ茅ハ　浮く

塊高如空を反梳の老ハ　立保

又撫すハす羽是帚のを　青泉

周佛の菊籠は胡の月　一黛

亦せん高ふを叙毎の尼　匏古

文字摺　伊豆郡　業杉

高の文字を摺ハ師筆墨ふ

撫切くの文字は川浅茅

雑詠や人新たなるれの隈
石のおのづからなる中よりの秋
まつかぜや四季のあせるなり

しそ

文字摺のうらよりのぞく夜　曦蓋
茅蜩さ海は鳥の山陰　田車
他郷するよりの秋すべて　豆苗
まれも仏さまされ因　郷　射牛
揚簀戸よ月さし入る紫苑　卜雨
まつもい鳥鶏南よ鶏ふ　十虎

業田新大江系

覚英の屋の山陰よりむすびみ
たるまゝ見て寝よ松ぞ秋
とゝまるより西上人の泊りまし
雪をもとめる勢の紀氏よりの
も立りけり秋地人の斧よ新
偏ゝ松系ちるのゝせあて
もの秋ふまるまつ墨者
鶏せを隠蓬まつ泉樹濱を
雲ふ法宗文よ塵ち秋出ろう
雲の老の山ゆ陽や松系寺　曦蓋
秋成ふ曹のうゝ　芦中

[illegible]

[illegible]　　柳美

[illegible]　　や蓼

[illegible]　　加生

[illegible]　　女柳原

伊達堺戸　　福爲

山城屋氏洞を拾ひ　[illegible]

[illegible]　　[illegible]

[illegible]　　[illegible]

[illegible]　　[illegible]

[illegible]　　[illegible]

[illegible]　　慧江

[illegible]　　夕芝

[illegible]　　蕉雨

[illegible]　　石涙

武隈書　　名所岩沼

世相より古きことをもとひ

つたなくも世をもとりひろ

[illegible]

わらはこそ角をもーや[illegible]

一本とそいふへ[illegible]

[illegible]

扇よのせゝすゑ流して墨
はなきまゝの井戸源氏の幼よ　体粹
爲の書の雲わゝるなり　長水
家あり〻ら集め紙自性畠地　素粒
部を三里退けバとびゝく　感之
遠樹邦　増田　茅文
それ邦よ所一番まゝ乱れきゝて
色ゝる地紙ゝ地ゝなりとせとゝ
せきゝまして急指る八女人の身よ
涙ふ縁より紙形ゝ重るやゝと
故風ゝ分紙形ゝ数の源

海羽紙足穢ちたゆ八きゝ海ちゝの
夏ゝ紙結ひゝく鶏ん掛きゝ　ゝきゝて　曉墓
御よちゝ八ちゝ紙の筆海　梅云
高人のゝゝよ紙高紙墓ゝゝて　生来
紙ゝ紙ゝ　たゝ物ゝい物ゝ　荘来
雪の墨紙月を月ゝく月ゝの　金来
雪ゝ月ゝ月ゝ墨紙八ゝ縄　九江
美方墳　仝
墓墓墨塚ゝゝ墨墓の墨ゝゝて
ゝくゝ墨ゝゝゝゝゝ墨ゝの器を墨

仏の花も百歩の葎に露けく
葵中将の古墳は済瓦郊と咲く
一時をとる経の呪蝶を悲しく思ふよ
みる形をも純人は期の跳によ
まつりしや今うつつの境すでに
あし雲井は志はよつく見鏡
為つらしうさくくまへは切ッよ
さ跳の為くら帰しりは定く
塚さくはまうなし揺り残星や世
以るよ好り切　仏の五月雨
織縁の瞼は代りさしと三絃よ

暁台
蕪山
完似

元来は三年居る輩呼すとも
粉くさて躬形いわふ菩の月
為方るの媒は日本のを姑蘓
仙臺藩多知唐往中
目出き之日は三色渺く仙扉よ
入らく草鬱は上けいやうく人の
経は出る弟居は志つくら果く
ら里くあしめく梅の醒たる
ム紀るそせく形を謀や猿は醸ふ
とひく折縁を扨の気志くきさく
連句の伝志くは歌り記一日

我則
菜宗
車蓋

郊外へ出て行くと田畑
の里一眺の清景すると蜂の
巣籠耳泉の地、南面
這わせる蔓もなく人家と畑の里の
人家と畑の里の日向に
丸生姿うすき清景の種蒔く
貝も見えひらけりとやすたうつと
見明るう色の製引く小宰相
雪を波うと海を雪うと
炎塩地
清ふるひうさと中せ赤の下ハ

蕣蕊
丈草
東鈍
蘂文
丸耳
鯉子

蕣初編四十四

面こそひ雪の景ふ雪を つまり 移ふ
の花蕣ふくと瓜の花紅の色 吸 残さ
ふ残て 実 交まこ ふと 行ふの 蕣の
枝をこ 枝よりくもつて 寂
炎塩地 色 飛 こ 風 炎 の 雪
ふうさと中せ カ さ 扇 紙
ふ 事 カ ふ と 雪 ふ の 雪 を 文 す
月 ふ ふ ふ の 雪 を 文 す
男 廉 昭 古 の 山 和 の ふ こ 篠 竜
橋 の 長 を ふ 戸 形 き 雪 傷
清 ぐ ぐ う 器

蕣蕊
菊夾
等水
蕣蕊
一芳
東地

艸のゆかりや花ハさくらにも色
えらまれて一葉の光繍を舞
極奥の地とおもひ〳〵て此を目
花さへ〳〵まうてきこえ清うれ
書様ま花のをうけ舞ちて来葉
前とうきあり線のと衣ぬらし
後の今の代える文字のむかしを
おもりふ強ひたまうへし
風わかる花やむかしき枝と有り　晩臺
髪東ゝ夜残の色く蝉　圭多
九年閏とやさし月の何ぬ庭移して　右幸

何となくのまふれ菜かむせて春　松宗
きらくと月の鏡残迹の実　東硐
花ハ大家のよもぎあの〳〵けるし　擬乙
出世出宕山　是非庵
本下ま仙扇の光陰残随ゐハ新実ハ
多蝶のてうし棚下の手や竹ま集る
うこれりふ在ハ新ふ山尖く籬へ寺
深海残楼世前
山中方風ゝとうま世や十日泉　暁臺
幟も花とちらし咲残　芳角
湿実ま睨し飾ハつふやきて　芳泉

棱の貴く僅もつるか透かな　松羅

月もとまれや杜にさらし洗濯　西夕

咲くに夢まにほめ衣波　嵐来

壺碑　素宝ハ唐

銘曰去蝦夷国界一百廿里今の
界ヲ隔るゝに余里や日本紀
兼行帯の湘ヲ日に見玉の夾　征
伐ありし奏聞日高見ハ今同国桃生郡
みかしハ太田の底に日高見明神
鎮座ます当時蝦夷に属すと云
一百廿里なるや此波湘標なるに

けふ後昔の鉄や西戎奴と呼ひし秋
貢す敷年来年我得く風雅に後
ふるまくやすいつれに環くに杖我
あるし鎧甍の跡あちこち
みちゆき出つゝ夏に至るる一家
碑文に古跡をかりへハ旅筆を執
情我感し後たゝ胸我せぬまく
眼に涙こそしき衰の衰
蓬羅旅のうへしるくしや
碑や古へ我老つゝ茂る日　驍基
あさ我足の帯の帯まくたへ　樵司

[illegible]

菓詠

[illegible]　女　[illegible]

[illegible]　中屋

[illegible]　古葉

橘の廣葉のもつとも長る

十芽萠　直菴

[illegible]柄の橘屑丹[illegible]の[illegible]懷[illegible]

例[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

蟬[illegible]

八[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

沉くと釜の烹おと沸りせく　寥平

鶴ふ九頭の友ゆとうゆり　寥濯

引きくる月のわくらゆの高さ雲　女　寥萩

萩う動ゆ・秋を見分け新　寥孫

安積　同色

うゆゆくと寄を又移よ

ゆゆゆ月よゆゆゆ亜花もうゆうゆ等　曉壺

の沸ゆゆ一鳴のうゆ業流ゆ　寥鐘

夕月よ袋たるゆの取ゆ其ゆ　寥英

沼波例よ男ゆゆゆ　寥滴

蓋ゆ沸ゆく箸よゆたゆる萩ゆ涙　寥嘩

影うゆゆゆの降ゆ吉日　寥蓊

千賀濱萩泊　文雄郎　塩釜

日ゆ波ゆゆ一弼の無沸ゆせんと

ゆ賀の濱沸ゆゆよ漕出ゆ船を

横ゆ波よ顧ゆハ老移ゆゆ沼波

のゆゆ新樹新ゆ蔵ゆ沼ゆ

平野なり

杉ゆ業後陰ゆゆ沼ゆ　嘩壺

波ゆのゆふよ岩を沼ゆ　魚行

酥ゆ弟ハ振ゆ逃ゆと見ゆく　鶴室

[illegible]　　左亭
丈六の[illegible]毫[illegible]　　釜濤
[illegible]　　宮紬

塩竈明神法楽　　同新

[illegible]　　鶴堂
むらふ潮よ法[illegible]　　雨石
うたをすらまと[illegible]の眉よ[illegible]　　〃
[illegible]の扇すく[illegible]　　〃
[illegible]　　〃
[illegible]　　〃

光富山大悲閣　　同

松陰八蒼[illegible]富山八[illegible]
[illegible]

[illegible]山[illegible]見[illegible]　　鶴堂
[illegible]風[illegible]　　東雲
杵唄[illegible]　　百馬
仕掛よ[illegible]　　武山
盃の[illegible]　　丈車
[illegible]　　羽音

結縄橋　　吉田郷古川

[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

玉柳

[illegible]

高館覧古　　盤井郡山ノ目

命絶親は[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

嗚呼死[illegible]

嚶[illegible]

川ハ二流は[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

雁のひとつよたちはやぬるる　顯左

月例八彩の雲やむらぬの霧　素風

砂路扇むる夕の殿系の雲の秋　珠明

まつのうちもまと志つ〳〵柿や紅葉　

高粘や志つ〳〵よ退〳〵偏ひとり　法橋雪秀

志〳〵志や一日飛〳〵雁の声　

苦さうり霜さらぬ里やこうんと雪　主津巨石

仙翁よ春日の水黄ひと時〳〵て

〳〵梅茂枯〳〵ぬ〳〵氷　

鶯子鳴〳〵志ハ〳〵〳〵動く小鳥　仙翁玄　赤紐

すゝ志さや日の雲ふ志ゝ志　菊史

あ志のつすり〳〵やりゝ〳〵る　紫文

末枯の志ゝまゝれゝ冬の月　紅子

川毎のそゝも紅〳〵さゝ志の風　素耕

志〳〵志〳〵鳥の〳〵〳〵夏の月　一芳

り秋や二変さゝ霜もゝ動秋　右幸

みのむしの唱ハ蕊よ柿黒ん　発耳

毎秋鳴ふ声如なり志下や　赤中

日さうゝハ〳〵霞士みを加〳〵鶯　千義

上手やと跡よゝ紅や田楼　等水

腸涙の志文さゝ〳〵志法〳〵紅　拾紅

紅梅やとり〳〵むつぶ如　文芝

、

[illegible]

知昇

[illegible]

松翁

[illegible]

[illegible]

の元

[illegible]

仏茶

、

[illegible]

陶家

[illegible]

望月

[illegible]

[illegible]

[illegible]

月星くもるかへ物うるおもしろきを
をしまやまつかぜやうよ池ひろく　汀砂
　　松籟

夕うるや陰陽うけたる堂庭　千賀浦　西石
物象の降けく霧よ入よりて　宝治　一歩
ひつまたたる雲の影や林の蒼　千蒼

鶴の子の子よ古たへなり霧の雑子　鶴嶋　春涙
捨てもや青の物川のすく簡　夢雅
ぬまてく寄る猫の宗ちや青の雨　吐虹
子猫の毛や二猫と二猫とハ学まる　二流

見るとの〻皆志ちるもけてを繊月　南楚
宮ちを学や勢うぬも又ハちう光　程く
雨ちうふ見頭ちを癖ある炭の梅　一黛
西雨やうかまぬ川のいこ深ま　立保
苔梅の紫月よせく月れ武　有泉
川梅やちうめく生ちを戻り色　匂古
鏡解ちをや嵐のちう化粉　偽々

蝶梅や見ちぬ世界と学まる　葉影　田車
新春の羽風よ行ちを浮巣部　豆苗

混淆甚だしきまでに紅のあく
迄ぬるとなく仮初の睦び
とうも浮世とは流水とかうもの中とう
銭同じう去るべく盛り程銭自ら
惜み申さぬもうつき合せ〳〵と
やうく雙亀の雲仮へたるあり
事後う程に銭に成りせり
廣うなるる日を新たに〳〵

曉蓋

明和七年庚寅秋七月

曉初上五十七終